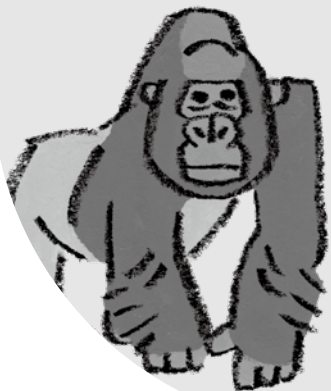


3章

ゴリラ の ウンチをさがそう



こつたすべての事柄が、今の自分につながっていることに気づく。

ニシローランドゴリラの森へ

2009年の11月、初めてガボン共和国に行った。

ムカラバ・ドウドウ国立公園で進められていた、山極寿一さんのニシローランドゴリラの研究プロジェクトに参加することになったからだ。

ガボンでのゴリラ研究の拠点は、国立公園内にくつももある大きな森の一つ、ブチアナの森のど真ん中のキャンプ地だった。チンパンジー研究を行ったギニアのボツソウ村では、一応、村の中にあるボツソウ環境研究所の実験室が拠点だったが、ガボンの森にはそのような場所はない。建物を建てられないので、食事やトイレ、実験も、打合せも、すべてラフィアヤシの葉で葺いた屋根の下（柱と屋根だけで、ほとんど野外と同じ）で行う。もちろん全員、テントで寝泊まりする。まるでゲリラの基地である。

毎朝、テントからはい出すと、近くの川で顔を洗い、朝ごはんを食べる。7時には、キャンプ地を出発して、ゴリラの群れを探しはじめる。そのころは、パパ・ジャンティと



森の茂みの中、シルバーバックが現れる

名づけられたシルバーバックに率いられた大きな群れが、キャンプ地の周辺に滞在していたので、森の中のけもの道をゆつくり歩いてゴリラたちを探した。シルバーバック（銀色の背中）とは、成熟したオスゴリラのことだ。オスのゴリラは大人になると背中（背）の毛が白くなってくるので、そう呼ばれている。

陽の光が明るくまぶしいサバンナに比べると、森の中は薄暗い。雨が降ると、森の中にはいくつもの小さな川と池が現れるので、長靴を履いてジャバジャバと進む。雨季の森には、いろいろな果物がなり、たくさんの動物たちが集まってくる。ゴリラばかりでなく、チンパンジーやマンドリルのような大型のも

のから、グエノン類のような小型のものまで、さまざまな霊長類が樹の上や地面を動きまわる。そして、サルたちが樹の上で食べ散らかして、下に落とす果実を目当てに、アカカワイノシシや、ダイカー類、ミズマメジカといった動物たちが樹の下をうろつく。さらに、マルミミゾウや、アカスイギユウのような巨大な動物が、果物を探して、昼でも薄暗い森の中をうろつきまわる。

この時期は、いきなり動物たちと出くわすことも多いのだが、基本は足跡によって動物たちを探しだす。ゴリラやチンパンジーは、手をげんこつにして、指の第一関節と第二関節の間を地面につけて歩く。ぬかるんだ地面に残っている手の跡から歩いて行った方向がわかる。ほかに、樹の上に葉っぱで作られた、前の晩の寝床や、その近くに落ちていたくさんのウンチ、ただよつてくるそのにおいも、重要な手がかりになる。こういった手がかりをもとに探し歩いていくうちに、たいていは樹の上で果物や葉っぱをむしゃむしゃと食べているゴリラたちを発見する。森の中に切り開かれた林道の跡をゴリラたちが横切るときも見つけやすいポイントだ。

ゴリラを見つけたら、次は、どうやって出したてのウンチを手に入れるかだ。



五感をはたらかせて、森の中を進む

昔から続く原生林では、下草や低木がほとんどなく、見通しもいいので、森の広場にたむろするゴリラたちをゆつくり観察できることもあった。古い林道の周りなど、人の手が一度でも入った森では、ボソソウの森と同じで、植物がぎつしりと生えていて見通しがきかないことが多い。そういうところでは、近くのやぶの中にゴリラのいることが声や気配でわかって、姿が見えないので、どこまで近づけるのかわからない。そんなとき、わたしたち「ウンコ屋さん」の頼りは、やつぱりにおいだ。やぶの向こうで、ゴリラたちが座りこんで昼寝をしていたり、子どもと遊んでいたりする気配のなかで、突然「ほわ〜ん」

とただよってくる。そうになると、わたしたちは早くゴリラたちが立ち去ってくれないかと、それぞれわしだす。

ガボンの森のテント生活で、とりわけ厳しいのは、雨季の気温と湿度だ。雨が降っていても、テントの中がびしょびしょになるほど、湿度が高い。そこまで湿度が高いと、携帯用カイロの働きが悪くなってしまう。それに気温が高すぎると、培地で増やした細菌が、そのまま増えすぎて、かえって死んでしまう。ボツソウ村では、建物の中で培養していたので、涼しい置き場所もあったが、森の中のテント生活では、どうしようもない。今回は新たに、近くの小川の流れの中に沈めておくという方法を編みだした。発案者は、いっしょに研究していた獣医師のピエール・フィリップ・ペアンギマさんだ。

ゴリラから新種のビフィズス菌を発見！

こうしてガボンでのゴリラ研究を、2009年から5年かけて行った。

2011年から、土田さやか博士が調査チームに加わった。土田さんは、理化学研究所でチンチラというネズミ類の腸内細菌を研究していたが、野生動物の研究がしたくて、わたしのところに来てくれた。

このときから、土田さんは、わたしの共同研究者として、ほとんどの調査に同行するようになった。初めて土田さんといっしょにフィールドワークを行ったのは、2011年5月のサハラ砂漠だった。いろいろ小さな事件が起こったが、そのときの土田さんの対応を見て、これならアフリカの森でも大丈夫と思ひ、その年の11月からガボンの森に同行してもらった。土田さんは、初めてのゴリラ



土田さやか博士